

吉井勇の戦中疎開日記
(下) — 「續北陸日記」抄2

細
川
光
洋

【翻刻】

吉井勇の戦中疎開日記（下）——「續北陸日記」抄2

細川 光洋

京都府立京都学・歴史館（旧京都府立総合資料館）の吉井勇（一八六〇～一九六〇）資料には、戦時下の吉井勇日記として「洛東日録」「北陸日記」「續北陸日記」の三篇（ノート二冊）が残されている。これらの日記や手帖は長らく出納不可であったが、二〇一五年秋より研究目的での特別閲覧が認められ、稿者は関係者の諒解の下に調査を続けている。戦時下の日記三篇は、B6判ノート二冊に縦書きでペン書きされている（題字は毛筆縦書き）。その内容及び執筆時期は次の通りである。

【洛東日録／北陸日記】 緑背ノート1〔資料番号2455〕

「洛東日録」 京都岡崎円勝寺への移転から富山八尾に疎開するまでの記録（昭和19・9・20～昭和20・2・8）。

「北陸日記」 常松寺仮寓期を中心とした八尾時代前半の記録（昭和20・2・9～6・23）

【續北陸日記】 茶背ノート2〔資料番号2456〕

「續北陸日記」 小谷契月居に仮寓した八尾時代後半から終戦を経て京都八幡の宝青庵に入居するまでの記録（昭和20・6・23～10・26）。

戦争末期の八尾疎開時代は、徳子前夫人の関係した「不良華族事件」に端を発する土佐流離時代（昭和9・4～昭和13・10）とともに、勇がその人生において最も苦汁を嘗めた時期であった。この時期、勇は戦後に刊行された歌集『寒行』、『流離抄』に収められる多くの秀歌を詠んでいるが、その歌の背景となる疎開生活の実態や各地を転々とした経緯・移転時期などについては不明な点が多かった。

今回、「北陸日記」「續北陸日記」を翻刻することで、その日記の記述より、各所への移転時期・仮寓期間が次のように明らかになった。作品の成立事情を考え、書簡資料との照合を行う上でも基軸となるものであろう。

【吉井勇 八尾仮寓先並びに期間一覧】

| | | | |
|--------------|-----------|---|------|
| ① 宮田旅館 | 昭和20・2・10 | ～ | 3・10 |
| ② 常松寺 | 昭和20・3・10 | ～ | 5・31 |
| ③ 小谷契月居 | 昭和20・5・31 | ～ | 8・22 |
| ④ 宮田旅館 | 昭和20・8・22 | ～ | 9・18 |
| * 上洛（京都ホテル他） | 9・18 | ～ | 9・24 |
| ⑤ 宮田旅館 | 昭和20・9・24 | ～ | 10・5 |

※終戦
※仮寓先決定
※八尾を去る

歌人の戦中疎開日記としては、郷里山形上山かみのやまに疎開した齋藤茂吉の日記が知られている。茂吉の日記は、漢字カタカナ交じりの簡潔な口語文で記されている。これに対し、勇の日記は和漢混交の文語文による日記である。その記述は、時局の動向や日々の出来事の記録のみならず、作歌の覚え書き、読書の記録・感想、手紙の授受、交友関係や朝昼晩それぞれの献立にまで及んでいる。なかでも、いつどのような歌をつくり、どの雑誌・新聞に送ったかという記録は重要である。その中には、多くの戦争歌も含まれている。勇の戦争歌は、戦後に編まれた歌集からことごとく削除され、その発表時期、発表媒体を含めて現在ほとんど知られていない。表だった結社を持たなかった勇は、戦後、茂吉や信綱ほど戦時中の歌についての批判を浴びることがなかったとされるが、戦時下の勇を考える上で、こうした記述は今後の調査の手がかりとなるものである。

今回紹介する「續北陸日記」後半は、終戦直後から京都八幡月夜田の宝青庵に移るまでの約三ヶ月間の日記である。疎開地八尾を引き上げ、戦後の出発点として再び京洛の地を選ぶまでの経緯が、敗戦もない時期の混沌とした世相とともに記録されている。進駐軍の動向やその風評、文学者の戦犯容疑に関する記述も貴重であろう。

なお、「續北陸日記」の翻刻及び本稿執筆にあたっては、これまでと同様にご遺族ならびに所蔵館と連絡を取り合いながら行った。日記には適宜読解の助けとなるよう註を施し、併せて解題を附した。

表記について

本稿では、原則として原本の記載、形式をそのまま再現するように努めた。日付の囲み表示も、原本によるものである。

表記については以下の通りである。

- 一 漢字は、旧字体のものも含めて、可能な限り原本記載の通り表記する。
 - 二 変体がな・合字は現行の表記に改める。
 - 三 かな遣い、送りがな、拗音・促音の表記は原本記載の通りとする。ただし濁点がなく難読のおそれがある場合は濁点を補う。
 - 四 おどり字は、漢字の場合「々」に統一するほか、原本記載の通りとする。
 - 五 振りがな・傍点・傍線は原本記載の通りとする。
 - 六 補いうる脱字並びに空白箇所は「」で補う。また、単純な誤字と思われるものには、マを附す。
 - 七 欄外記載は、各日の記述の後に「右欄外」「左欄外」として示す。勇の日記では欄外指示を概ね×で示しており、原本記載の通りとした。
 - 八 解読ができない文字は□で示し、無理な推測は避けた。
 - 九 各日の日記は一続きの文章と見なし、追い込みとした。
- (本日記中には、今日の人権意識に照らして不適切な表現箇所がみられるが、時代背景や記録の性質、および著者が他界していることなどを鑑み、原本通りの記載としている。)

翻刻「續北陸日記」

昭和二十年八月

〔十七日〕七時起。城ヶ山あたりを散歩しつつ吾等が前途のことを考ふ。孝子の希望もあり、予等が残生を送るべき地としては伊豆あたりを選むべきか。八尾に在る間の歌業としては歌集二冊。曰く「雪雷」曰く「短歌風土記加越能の巻」この日も晴。空の晴れたるはかへつて寂し。午前、「夜明け前」を續讀。手紙を書く。午睡極めて少時。午食、馬鈴薯。午后「夜明け前」第一部讀了。中部日本より原稿受取の使ひ来る。随筆の註文ありたるも断りたるもの、突然にて用意なく気の毒ながら空しく皈す。歌など作りて送らむとおもふ。三時の放送にて内閣成立を傳ふ。総理大臣兼陸軍大臣稔彦王、海軍大臣米内光政、内務山崎巖、外務大東亜重光葵、軍需中島知久平司法岩田宙造、その他、外に國務大臣近衛文麿、全兼情報局總裁緒方竹虎。要するに實質は近衛内閣ならん歟。三重吉の「千鳥」を読む。孝子と共に鏡湯にゆきたるも今日も休み。夕刻秋路氏や酔ひて酒を携へて来る。小谷氏と三人胡瓜にて一飲。晩食、茶飯、椎茸清汁、塩胡瓜。夜、月明に乗じて打合橋方面を歩む。雑談の後十時頃就寢。蚤多くして眠りがたし。

〔左欄外〕×大蔵、津島寿一、厚生兼文部、松村謙三、農務、千石興太郎、運輸、小日山直登。

〔十八日〕七時半起。今日も晴。歌をつくる。「中部日本」の

ために「詔を拜して」五首。漸く仕事にかかる元気を生ず。朝食、茶飯、椎茸汁一椀、味噌汁一椀。午前、北日本の歌を選む。(十三首)直ちに送る。午食、きな粉。午后、郵便局にゆきたる后川崎氏を訪ふ。話あまり愉快にあらず。當分訪問を見合はずべし。これを塗説に聴く。今年の秋は農家供出を肯んぜず、為めにこの節は食糧むしろ豊富なるべし、殊に薩摩芋はその最たるものたらんと。更に又言ふものあり、東京、その他既に数万の敵軍入城せりと。手紙を書く。藤村の「夜明け前」第二部を讀み始む。放送は前田多門氏の文相就任を傳ふ。鏡湯にゆき皈り来れば富山の中山為義氏在り。画帖及び短冊一葉を渡す。梨、トマト、茄子、南瓜、冬瓜等を貰ふ。晩食、馬鈴薯玉葱煮付、飯三椀。夜、孝子と共に月光を踏んで打合橋辺まで散歩。夜氣既に秋、鈴蟲鳴きすいつちよ鳴く。九時過就寢。いろいろ考へて眠り難し。人生は結局孤独なりと思ふ。

〔右欄外〕×十一時前村島夫人来訪。村島氏の母堂その他富山にて戦災死の由。

××西尾町長に會ふ。

〔左欄外〕□この報おそらく誤傳ならん。

△赤倉の放菴氏より来状。「歌をつくりて薈を忘る、これを歌遁の術といふ」と

〔二十日〕七時起。床中三重吉の「小猫」を讀む。今日も晴れたり。昨日荷風、潤一郎両氏より来状。朝食、味噌汁一椀、飯三椀。午前、小谷氏飛驒よりかへり全地方の人心の動揺を傳ふ。流言乱飛憂ふべき限りなり。午睡少時。手紙を書

く。午食、きな粉。午后、「夜あけ明」を讀む。秋路氏を訪ひ箱入封筒をたのむ。皈りて黙阿彌の「三人吉三」を讀む。村海老亭来る。玉子の代りにシロゲン茄子等持参。今日は暑さ甚し。新聞来らず。晩食、南瓜うま煮、冬瓜清汁等。夜、上水にゆきて裸浴。八時頃玉生氏酒、麥酒各一本を携へて来る。トマト、胡瓜等にて小谷氏と鼎座して一飲。麥酒は幾月ぶりならむ。玉生氏曰く。軍人等昂奮して電気ビルのシヤンデリア等を破壊せりと、これにては皇軍にあらず、匪賊の如し。敗くるも又宜なるかな。十二時近く就蓐。

〔右欄外〕×「いづれ勝山に世を忍ぶ事になるでせう、荷風老人」荷風先生思つた程やつれても居られず元氣一杯にて昔日と異ならず、潤一郎

〔廿一日〕八時起。昨日の新聞を見るに陸軍中将小畑敏四郎國務相となる。朝食、飯二椀、冬瓜清汁二椀。午前、黙阿彌の「加賀鳶」を讀む。午睡少時。午食、馬鈴薯味噌煮。午后、藤村の「夜明け前」を讀む。やや退屈也。大賀君より来状。宮城前にて兵士割腹、海軍機都上を飛び徹底抗戦の傳單散布、陸軍躍起部隊の名にて同じく徹底抗戦のビラを貼布等のことを報ず。東京の動揺見るが如し。新聞に依れば、廿日朝よりマニラ湾の米戦艦の上にて停戦協定の會議始りある由。今日も晴れて蒸し暑し。手紙を書く。晩食、馬鈴薯茄子味噌汁等。夜、上水にて體を拭く。街を散歩。防空管制廃せられて往来やや明るし。九時過就蓐。よく眠る。

〔廿二日〕八時起。漸く曇り来る。朝食、味噌汁。午前、歌集「流離抄」の内容について構想。「加賀鳶」讀了。午食、

きな粉二椀。午后、「夜明け前」を讀む。小谷氏より話あり。藤井氏の子供二人質扶斯となり、若し罹患さると申譯なければ、一時宮田旅館へでも移られたしとのこと。猶今後は二階の物置を部屋に改造、そこにゐてもらひたしとの申し出もあり。八尾居住については考慮すべき時機に到達したるの感あり。夕刻、手廻りの荷物を携へて宮田に移る。晩食、鮎（小さきもの）塩焼、野菜サラダ、茄子汁。夜、秋路居まで散歩。秋路氏荷物を携へて来る。鮎をたのむ。九時頃就蓐。小雨来る。蚤多くして眠浅し。×

〔次項右欄外〕×大本營発表に依れば、廿六日より聯合軍の空挺部隊厚木に、聯合艦隊相模湾と東京湾に、それぞれ進駐を開始することのこと。

〔廿三日〕七時起。金窪氏へ居所相談の手紙を書く。曇。暑し。朝食、露、虎杖、茄子味噌汁。午前、「夜明け前」を讀む。努力には敬意を表すれども名作にあらず。午睡少時。雨降り出づ。午食、胡瓜もみ、茄子味噌あへ。午后、廣田壺中居、村海老亭の両氏来る。今後の文学美術のことなどを語る。「夜明け前」續讀。終日古旅籠屋に籠居。晩食、コロツケ、金牛牛蒡、豆腐味噌汁。夜、涼気をおぼゆ。秋路君来る。鮎明日あたり手に入る由。九時頃北陸銀行の中島、宇津井両氏に予が座敷を提供。三人にて十一時過まで一飲。オムレツ、とろろ昆布などにて酒一升。十二時近く就蓐。

〔左欄外〕××聯合軍上陸の報に恐怖するもの軍人に多く、彼等が支那などに於てなせる悪行の復讐を怖るるなりと。（壺中居の説）或ひは然らん。

*1 歌集二冊……「雪雷」「短歌風土記加越能の巻」はいずれも未刊。歌集『寒行』、『流離抄』の原案と見られる。

*2 赤倉の放菴氏より来状……昭和二十年八月十一日付小杉放庵書簡（歴史館所蔵）。書簡の末尾に、「春頃天彦をよみ出してそれに誘はれて曾遊の旅の歌を次々こしらへて自ら慰めて居ります。歌遁の術でせう」とある。

*3 荷風、潤一郎両氏より来状……昭和二十年八月十四日付永井荷風・谷崎潤一郎の連名による書簡（歴史館所蔵）。岡山勝山町の谷崎の疎開先から投函されたもので、文面は次の通り。

昨夜から谷崎君の御世話で勝山にとまつてゐます。明日岡山に歸りますがいづれ勝山に世を忍ぶ事になるでせう。委細郵書にて。荷風老人拜
荷風先生思つた程やつれても居られず元氣一杯にて昔日と異ならず大いに安心仕候。いづれ詳細後便にて申上候
十四日 潤一郎

*4 村海老亭……村安太郎（？〜一九五）。富士市の老舗料理屋「海老亭」の初代与三郎の長男。八月一日の富山大空襲で罹災し、妹夫婦とともに八尾に疎開。

*5 防空管制廃せられ……八月二十日正午を期して、全国一斉に燈火管制（準備管制）が解除された。

【戦後の「居所」の問題】

八尾での疎開時代、勇を悩ませ続けたのは「居所」の問題であった。宮田旅館、常松寺での仮寓を経て、ようやく小谷契月居に落ち着いた勇夫妻であったが、終戦の一週間

後、同居する藤井氏の二人の遺児がチフスを発症し、その罹患を避けるために、再び宮田旅館での客舎暮らしとなる。小谷氏からは「二階の物置」を勇夫婦の部屋に「改造」するとの申し入れがあったものの、これを期に、勇は八尾での疎開を切り上げることが本気で考え始める。

日記によれば、当初、「残生を送るべき地」として考えていたのは「伊豆あたり」のようである。親族が住む関東に近い地がいいと、孝子夫人が希望したからであろう。熱海には旧友谷崎潤一郎の別荘もあり、高知以来の友人で気心の知れた田岡典夫も移り住んでいた。勇には、伊豆に「芸術村」を建設したいという思いもあったようである。

思案の末、勇が「近畿居住」を決意するのは九月四日。この日の日記に、「手紙を書く。結局再び近畿居住と決意、その依頼状也」とある。

廿四日 八時起床。曇りて又少しく暑し。朝食、味噌汁、卵の花。午前、菊沢にゆきて理髪。玉生氏を訪ひ藝術村建設の意図を話す。平野源藏氏を訪ひたるも不在。「陶淵明詩集」を讀む。俗気ありて詩品高からず。午食、わさび味噌、雑炊一碗、きな粉一碗。午后、草平の「輪廻」を讀む。八雲書店より速達来る。十七日出のもの今日着。東京八尾間に要する日数八日。「決戦歌集」を止め「新日本歌集」として出す由。内容も一変せるにつき直ちに原稿の作成にかかると。玉生君も今日長居すべきところにあらずといふ。まことに然り。予も近くここを去らん。四時頃鏡湯にゆく。

常松寺の和尚に會ふ。夕刻玉生氏に電話して酒一本を獲得。晩食、蜆汁、野菜サラダ。酒一酌。夜、雨時々来る。八時過就寢。夢を見る。

廿五日 六時半起。新日本歌集の原稿を書く。題名は「光悦」と仮定。曇りてやや涼し。朝食、牡丹餅一個、味噌汁、わさび味噌等。午前、新聞を見るに、焼失都市四十四都市、家屋の全焼二百二十一萬戸、死傷者六十八萬名、罹災者九百二十萬名。原子爆彈の被害、廣島は死者六万以上、負傷者十万以上、長崎は死者一万以上、負傷者二万以上。下村定大将陸相となる。ボース印度主班飛行機事故に死す等の記事あり。歌集の名を「金泥（こんでい）」と定む。原稿完成。「夜明け前」を少しく讀む。午食、にしん、大豆カレー煮。午后、歌集のルビ振り。小谷氏来訪。小荷物持参。小橋氏より馬鈴薯煮干、養徳社より「寒行」の原稿を送り来る。蒸し暑きこと甚し。夕刻歌集のルビ振りを了す。晩食、馬鈴薯煮付、胡瓜もみ、茄子うま煮。小酌。夜、秋路君来る。畑の胡瓜、茄子持参。この人八尾にてはめづらしき善人也。郵便を出しにゆき街を散歩。九時頃就寢。熟睡。

廿七日 六時起。「夜明け前」を讀む。快晴。今日も暑からん。朝食、茄子油焚き、胡瓜胡麻あへ、味噌汁。午前、歌をつくる。「高志消息」中の谷崎潤一郎数首。久しぶりの歌作、やはり楽し。郵便局にゆき歌集「金泥」の原稿を八雲書店へ送る。新聞を見るに疎開復飯を抑制、六大都市の人口を戦前の三分の一になすといふ。予も今後の居住については考慮の要あり。北日本新聞の歌の選を了す。本月第

二回目分（九首）直ちに送る。歌集「流離抄」中の「高志消息」を了す。風烈しき中にて午睡少時。「夜明け前」讀了。やはり巨篇にして讀后多少の感慨を覚えしむ。夕刻小谷氏来訪。おわら踊一月延期の由。晩食、鯛むしり焼、卯の花、冬瓜汁。不飲。夜、並木五瓶の「五大力」を讀む。颱風の気味。夜に入るに従つて烈しくなる。泊り客には除隊の兵士多し。飯るに際し官有物を與ふるとは眞歎。軍規の乱脈驚くべし。九時頃寐ねたるも蚤多くして眠れず。×〔右欄外〕×この日の暑さ、九十三度なりといふ。

廿八日 六時起。歌をつくる。「流離抄」中の「北陸荆中吟」数首。今日も曇りて蒸し暑く颱風いまだ全く去らず。朝食、冬瓜、わさび味噌、味噌汁。この辺胡瓜を汁の実とすれどもまづし。午前、新聞を見るに、聯合軍進駐二日延期、廿八日空輸部隊厚木に、卅日横須賀に九月二日東京湾上にて停戦協定調印式となる。又第二次進駐は南九州地区にて、九月一日より開始の由。「輪廻」を讀む。歌の手帖の整理。五瓶を讀みつつ午睡少時。午食、冷奴、梅干、粥。午后、歌をつくる。「荆中吟」数首。喜多村緑郎君より「一本刀土俵入」舞台面の寫眞を送り来る。句あり曰く、「おわら節唄ひしも二年前の夏」富士原表具店より玉堂、一洋の幅を届け来る。一洋の繪繪の具かすれあり。表具師の仕損じなるべし。今日は昨日よりも暑し。夕刻、孝子と共に散歩に出づ。禪寺の釣橋を渡り山吹橋を渡りて飯る。途中小谷氏夫妻に會ふ。水浴の後晩食、冷奴、冬瓜、金平牛蒡。酒一酌。夜、座敷を提供、早く床に入る。隣室の客饒舌にして眠りがたし。暑もまた甚しく汗しきりに出づ。

【三十日】早曉四時頃胃のあたり痛みて目覚む。上圍すれば下痢。おそらく黄な粉のゆゑなるべし。五時半起。快晴。朝食、茄子煮つけ、馬鈴薯味噌汁。草平の「煤煙」を読む。「寒行」の訂正、戦争に関する歌全部削除と決意す。「荊中吟」の歌の整理。午睡一時間。今日も暑し。午食、冷奴、卯の花。午后、「梅の由兵衛」讀了。歌集「寒行」の訂正を大体了る。初瀬川君より来状。近衛公に會ひたりと樂觀の様子也。暮にはサンキストのオレンヂが食べられる由。夕刻秋路氏宅まで本を返しにゆく。途上秋路氏に會ふ。驟雨来る。新聞を見るに聯合軍は九月一日横濱、館山にも上陸の由。晩食、蕨白和へ、茄子煮つけ等。夜、五瓶の脚本續讀。雨沛然として来り、その凄じき音は奔流の如し。八時過就寢。よく眠る。やや寒きを覚ゆ。

【卅一日】五時起。歌をつくる。「蚤の歌」その他。再寐して七時半起。雨瀟々、秋涼。朝食、馬鈴薯カレー煮、味噌汁。午前、歌をつくる。「荊中吟」数首。「寒行」の改訂に従ふ。雨降り歇まず。午食、塩鯖、とろろ昆布。午后、「煤煙」五瓶の脚本等を読む。「寒行」の改訂を了す。歌数六百八十九首。戦争歌を削除して寧ろ気品高まれる感あり。井上氏等より来状。寒ければ單衣を重ね着す。晩食、鯛野菜煮、茗荷味噌、冬瓜汁。夜、新聞に依れば、横須賀に入港せる聯合軍の艦船三百八十隻の由。首相宮人民より直接手紙を求めらる。善政と言ふべし。夜、五瓶の脚本を読む。草平の「煤煙」つまらなければ中止。九時頃就寢。

〔右欄外〕×井上君の手紙に依れば、十五日夜鈴木首相平沼

枢相邸焼討、愛宕山上にて手榴弾自殺、上野美術館に海軍立籠り等のことありたる由。

*1 新聞を見るに疎開復版を抑制……昭和二十年八月二十六日の『北日本新聞』紙面に「疎開復版を抑制／六大都市人口・戦前の三分の一」の記事がある。六大都市とは、東京都区部、大阪市、名古屋市、横浜市、京都市、神戸市。「食糧、住宅問題、とくに聯合軍占領下の國內輸送事情」などにより、疎開者の六大都市への復帰を当分の間抑制するというもの。聯合軍の本土進駐に対する施策の一つで、これにより、勇の京都市内への即時復帰は困難となった。

*2 おわら踊一月延期の由……八尾の「おわら風の盆」は九月一日〜三日に開催されるが、昭和二十年は結局取りやめとなった。戦中でも前年までは開催されており、この二年が昭和以降で唯一度の中止である。聯合軍の本格的な進駐や降伏文書調印の時期と重なり、自粛したと見られる。

*3 九十三度……華氏93℃で、摂氏34℃ほど。

*4 喜多村緑郎君より……昭和二十年八月〇日（消印）喜多村緑郎書簡（歴史館所蔵）。「一本刀土俵入」の舞台写真絵葉書に次の句が記されている——「おわら節口にした二年前の夏」。長谷川伸「一本刀土俵入」のお薦は越中八尾の出身とされ、劇中で「おわら節」の一節を唄う。

【「決戦歌集」から「新日本歌集」へ——決戦歌集『神杉』草稿の発見】

八雲書店より、戦意高揚を名目とする「決戦歌集」叢書

の依頼が届いたのは、七月三十日のこと。依頼内容は「六十四頁の本にて旧作自選」ということであつた。勇は早速編輯に取りかかり、この日のうちに一冊分の草稿をまとめあげる。題の初案は「星雲」、改題して「神杉」とした。翌三十一日にはルビ振りまで終えている。

八月十四日の日記には、八雲書店より「原稿未着」の連絡があり、再稿を作成。十五日の午前中に、そのルビ振りを終えたところで、正午の玉音放送を聴く。終戦の日の日記には、「今さら何の決戦歌集ぞ。「神杉」の原稿を破却」と記されている。

こうした経緯から、決戦歌集『神杉』の原稿は遺されていないものと考えられたが、このほどさらなる調査により、京都府立京都学・歴史館にその草稿と見られる原稿用紙三十枚の所蔵を確認することができた〔資料番号2171〕。「歌集神杉」という勇のペン書の上に、編輯者により「決戦」と鉛筆で書き入れがあることから、当初「未着」とされた初稿であると推定される。

八雲書店から刊行される予定であつた叢書「決戦歌集」については、齋藤茂吉の歌集『萬軍』¹⁾が知られているが、他の歌人の決戦歌集はこれまで確認されておらず、全体像がわかるものとしては吉井勇の『神杉』がその二例目となる。表題となつた一首「神杉の雫に濡れてゆくほどに身ぬち澄み来てわれあらずけり」（「伊勢の神宮」）をはじめとし、収録予定であつた戦争歌の多くは戦後の歌集にも未収録であり、吉井勇が戦争をいかに歌に詠んだかを知る上で、たいへん重要な資料といえよう。

日記をみると、「決戦歌集」が戦後まもなく「新日本歌集」に切り替わつて出版された経緯がよくわかる。八雲書店から「決戦歌集」を止め「新日本歌集」として出す由の「速達」は、終戦のわずか二日後「十七日」に出され、勇の許に八月二十四日に届いている。こうした変わり身の早さに対し、同様の依頼状を受け取つた川田順は次のような書簡を勇に寄せている（昭和二十年八月二十五日付川田順書簡、歴史館所蔵）。

八雲より「新日本歌集」の件 大兄へも申越候事と存上候。戦争終結せしとて、掌をかへす如く、ソツポ向き、花鳥風月詠のみ並べ候事も男らしく無く、此点にて、小生歌集編纂に悩み候。不即不離といふやうな事で往くべきものか。

「新日本歌集」への当惑を述べる順に対して、勇は速達を受け取つた翌日二十五日には歌集『金泥』（初案「光悦」）の原稿を完成させている。戦争歌を全く廃し、光悦、大雅、宗達、利休、芭蕉、蓮月らの古の風雅の世界を詠んだ歌を集める『金泥』は、むしろそれゆえに「掌をかへす如」き世相への批評性を持つものともいえよう。

歌集『金泥』は、昭和二十年十一月に「新日本歌集」叢書の一冊として刊行（初版二万部、定価一円五十銭）。「新日本歌集」叢書はこの時八冊同時に刊行されており、他の七冊は次の通りである。――川田順『夕陽居歌抄』、土岐善磨『秋晴』、吉植庄亮『稲の花粉』、結城哀草果『鶏鳴』、佐佐木信綱『黎明』、齋藤瀏『光土』、下村海南『蘇鉄』。なお、「新日本歌集」叢書の表紙は、いずれも中川一政

の画「蜻蛉」による同じ装幀となっている。後に引かないことから戦捷（勝ち戦）のシンボルとされる「蜻蛉」の表紙画は、この叢書の来歴を物語るものであろう。今回あらたに確認できた決戦歌集『神杉』については、いづれ詳細な検証を試みる予定であるが、まずは現行の『金泥』との対照表を示しておく。

| | |
|-------------------------------|---------------------------------|
| 決戦歌集 | 新日本歌集 |
| 神杉（初案・星雲） | 金泥（初案・光悦） |
| 六十四頁（予定） | 五十四頁 |
| 一八七首（草稿） 本文 | 一八二首 本文 |
| 〔巻後に〕 昭和乙酉仲夏 越中国八尾町客寓にて | 〔巻後に〕 昭和乙酉初秋 越中八尾の客舎に於て |
| 小谷契月居での編 | 宮田旅館での編 |
| 未刊（破却） | 昭和二十年十一月刊 定価一円五十銭 （初版二万部） |

*本文とは別に、それぞれの「巻後に」に次の一首がある。「われすでに鬢白めども三越路の中つ國邊にやはか老いめや」

昭和二十年九月

一日 五時過起。「寒行」を再検討。雨霽れたれど曇れり。朝食、冬瓜煮付、全胡麻あへ、味噌汁。午前、一日なれば例に依り八幡宮に詣づ。飯途井田川の川辺を歩き秋路居及び郵便局に寄りて飯る。途上岩城署長、長谷川北日本記者に會ふ。鶏一羽を購ふ。六十五円。辰野隆の「忘れえぬ人々」を讀む。午食、鶏牛蒡、冬瓜汁。午后、雨降り出づ。所々より手紙来る。熱海の緑風に句あり。「空も海も敵ばかり也秋暑し」砂人祇園にて二日つづけて痛飲とのこと。居所の問題について頭を悩ます。四時頃孝子と共に高熊鉾泉にゆく。創元社矢部氏より来状。「短歌風土記」は今后續刊してくれる由。歌精進の氣大に起る。この分には予の今後の歌業は万々歳ならん。この日酒五合配給あり。晩食、鶏肉、豆腐、玉葱、あるさめすき焼。酒二合と宿よりの一合。丸本氏来り葡萄酒持参。ともに飲む。久しぶりのすき焼に鼓舌す。微酔。夜、丸本氏のために隣室を提供。八時頃就蓐。こよひ蚤なく熟睡。夜半街頭をおわら節をうたひつつ過ぐる一群あり。この夜風の盆なるがゆゑなるべし。

三日 五時半起。六時過丸本氏富山へ飯る。手紙を書く。雨霽れたれど曇りて寒し。朝食、茄子味噌煮、茗荷味噌汁。午前、手紙を書く。歌をつくる。「陶淵明」数首。「忘れえぬ人々」を讀み、一中時代の谷崎潤一郎を思ふ。午食、煮

奴、春雨入りスープ。午后、「忘れえぬ人々」讀了。午睡少時。全しく辰野氏の「印象と追憶」を讀む。蟬の聲喧し。金窪氏よりの返事来らず。八束氏よりの來信に依れば十七日に出したる書状廿八日に着きたる由なれば手紙或ひは未着なるか。兎も角郵便局にゆきて打電返事を促す。新聞を見るに二日午前九時東京湾米艦上にて降伏文書の調印を了れりといふ。晩食、野菜天ぷら、冬瓜酢のもの等、小酌。夜、五瓶の「富岡恋山開」を讀む。雨降り出づ。他の客へ座敷を提供。八時頃就蓐。熟睡。四時まで覚めず。

四日 五時目覚め、床中今後の居所について思案す。如何もはつきりしたる方策立たず。今日も雨。朝食、冬瓜、茄子等。午前、手紙を書く。桑野夫人に山北の地價及び家の値段を問ふ。午睡少時。平野源蔵氏より菜種油を届け来る。雨降りみ降らず。郵便局にゆき速達を出す。「三四郎」と「印象と追憶」を讀む。午食、冷奴、わらび、粥。午后、「印象と追憶」讀了。手紙を書く。結局再び近畿居住と決意、その依頼状也。雨降りやまずして憂鬱。晩食、茄子辛子煮、野菜サラダ。夜、新聞を見るに賀川豊彦、大佛次郎等首相囑託となる由。急轉換といふべし。九時頃就蓐せむとしたるところへ小谷氏や酔ひて來訪。二階の物置改造部屋へ飯来せよといふ。確答を不與。十時近く就眠。この夜もよく眠る。

六日 七時過起。曇。朝食、蕨、茄子味噌汁。午前、理髮にゆき、飯途平野氏を訪ふ。無花果、抹茶二椀。五瓶の脚本を讀む。午睡少時。午食、茄子辛子煮、粥。午后、手紙來

る。谷崎氏は岡山にて越冬、荷風氏は飯東、香櫨園の叔母の家小型爆弾にて一部破壊、等々。村海老亭酒一瓶を携へて来る。ともに小酌。酒四合を置きて去る。禮の意味に五十金を與ふ。夕刻、孝子と共に井田川の岸を十三石橋の辺まで散歩。晩食、ほつけ塩焼。鶏玉葱煮付。小酌。夜、新聞を見るに海軍の損害、戦艦十二隻全滅、航空母艦廿五隻中残れるは僅か二隻、巡艦四十七隻中これも三隻、敵の宣傳ビラ聯合艦隊全滅を傳へたるは事実なりき。八時過就蓐。この夜蚤多し。曉猛雨あり。

十三日 雨。六時過起。手紙を書く。朝食、胡瓜もみ、卯の花。午前、雨歇みたれど曇。ラヂオは杉山元帥の自刃を傳ふ。秋路君来る。閑談に時を過す。「蝸牛庵聯話」を讀む。洩しきりに出づ。午食、かすご豆腐、枝豆。午后、斎藤三代治氏より速達二通、土井虎賀寿氏の家を断り、丹波市の家を希望の旨返電。上村氏井の本氏よりは進駐軍來りて後の状況を見定むるまで待期せよと申し来る。美術館、公會堂、國際航空、都ホテル等には進駐軍入り、河原町以東三條以南七條以北の東山区大半はその慰樂区域となる由。(祇園、先斗町、宮川町は皆その中に含まれることとなるわけ)。京洛の地ももはや旧態を存せざるべし。「俳文学論考」を讀む。晩食、牛肉馬鈴薯うま煮、茗荷味噌、冬瓜汁。夜、笹餅を貰ふ。一個づつ食す。雨降り出で暴風雨のごとし。九時過床に入る。頓服を飲みたるに流汗淋漓。

十四日 六時起。雨止みたれど風あり。蒸し暑し。朝食、茄子油煮、茗荷味噌汁。午前、歌をつくる。「秋路の笛」「立

山遠望」「火鉢の歌」等。「蝸牛庵聯話」を読む。午食、かすご、蕎、粥。午后、三重吉の「金魚」を読む。中山氏より使にて水瓜、小豆等を届け来る。三時過小谷氏宅にゆく。屋根裏の座敷を見せらる。陰鬱住むに堪へず。秋路氏と會談して販る。夕刻より雨降り出づ。風邪ややよし。晩食、鱈煮魚、ほつけ胡麻若芽、南瓜等。夜、雨のため漸く寒し。「俳文学論考」を読む。新聞を見るに、東條大将は命をとりとめて米軍病院に在り、米人看護婦に風呂を使はせてもらひゐると。醜態といふべし。焼唐もろこしを食す。座敷を他の客へ提供、九時前頓服を飲みて就寝。この夜も流汗甚し。

* 1 夜半街頭をおわら節をうたひつつ過ぐる一群あり……當時を知る八尾の方々によれば、踊りの連はなく、唄い方、囃子方（胡弓・三味線）のみの町流しだったという。

* 2 谷崎氏は岡山にて越冬……昭和二十年九月一日付谷崎潤一郎書簡（歴史館所蔵）。書簡に「兎も角も此處にて越冬の覚悟に仕候」とある。

【降伏文書の調印と進駐】

降伏文書の正式な調印は、昭和二十年九月二日、米戦艦ミズーリの艦上で行われた（日本全権・重光葵外務大臣）。日本政府はポツダム宣言を受諾し、無条件降伏を布告。これにより、日本は連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の占領下に入った。総司令官は、マッカーサー元帥。戦後日本の占領期は、この後、昭和二十六年九月の「サンフラ

ンシスコ講和条約」まで続く（発効は昭和二十七年四月二十八日）。調印式に先立ち、八月二十八日には聯合軍の本土進駐が開始されている。同月二十六日の新聞にみる六大都市への疎開復帰の抑制も、進駐軍を迎え入れるための対策の一つであった。

このような戦後の緊迫した情勢と重ねて見るとき、九月一日から行われる予定であった「おわら風の盆」の開催が見送られたのも致し方なかったといえよう。九月一日は、降伏文書調印の前夜であった。またそれだけに、勇の日記に見る「おわら節をうたひつつ過ぐる一群」の哀調も深まるのである。勇が実際の「おわら踊り」を見るのは、昭和三十三年九月の八尾再訪の時であった。

九月十三日の日記をみると、京都の知人から「進駐軍来りて後の状況を見定むるまで待期せよ」という連絡とともに、進駐軍のための「慰楽区域」に関する詳しい情報が寄せられている。西川祐子『古都の占領 生活史からみる京都1945-1952』³⁾によれば、九月二十五日からの占領軍の京都進駐以前、すでに九月初めから京都では周到な受け入れの準備が進められており、占領軍将兵を対象とする慰安施設の概要も、九月九日の『京都新聞』に「急テンポでキャバレー六ヶ所、ダンサー志望も既に二百名、新粧する京都」という見出しで報道されている。同記事には、「祇園乙部、宮川町、七條新地、島原、中書島が進駐軍の慰安所として指定」とあり、勇に伝えられた情報もこれらの報道をもとにしたものであったと考えられる。十八日からの勇の上洛

(家探し)の日記は、進駐前夜の京都の様子を伝えている。

十八日 二時半頃目覚むれば暴風雨。電燈も消えて黒闇々。

そのまま眠らずして暗中にて支度。幸ひ雨歇みたれば五時過ぎ孝子と共に宿を出づ。六時二分八尾発の列車にて富山に来る。爆撃の跡猶そのままにして惨憺たり。異臭漂ひ蠅多し。六時四十分富山発米原行の列車に乗る。乗客思ひの外少くして座席を得たり。車内にて朝食の握り飯二個。枝豆を食す。暴風雨猶止まず。途中高岡あたりにて汽車不通の噂を聴きて愕然たり。然し事なく通過、漸く暴風圏を脱してやや延着の后米原着。午食は車中にて焼むすび一個半。米原より京都までは座席を得ざりしも、さまで苦しまず無事に六時半京都に着す。直ちに京都ホテルに入る。食堂にて晩食、スープ、魚、貝柱の三種。沐浴の後更に焼握り飯一個。八時過就寝。夢を見たるも熟睡。月明らかにして美しき夜なり。

十九日 六時起。半晴半曇。孝子は昨夜傘を失ひしことに氣付く。遂になし。「文藝」所載井伏鱒二の「里村君の繪」を讀む。戦争のことを書きたるもの、今となりてはすべて悲し。朝食、握りめし一個半。午前、斎藤氏を訪ひたるころ、奈良の家は前住者動かず殆んど見込なき由にて落膽す。本庄氏を訪ひたる后高折氏を訪ひたるも不在。販りて午食。スープ、鯨肉等。午后、八東、斎藤両氏来訪。八幡に家ありとのことにて八東氏直ちに相談にゆく。高折病院を訪ひ高折氏に會ふ。初瀬川君来り、いろいろ政界裏面の

情勢を聴く。販りの汽車の切符を頼む。南座にゆき切符を買ひ、亀井氏を訪れたるも不在。新京極を漫歩して販る。晩食、スープ、魚、貝柱。夜、井ノ本君を訪ひたるも不在。先斗町のダンスホールを前より一見して販る。京都は祇園の歌舞練場もダンスホールとなる由。もはや再び以前の如き祇園情調には接し難かるべし。八時頃八東君来り、紅葉寺の一室を暫定的に借りては如何とのこと。廿一日見にゆくことを約す。戦争犯罪者文学者に及ぶとの説あり。予の如きは如何。この夜月極めて美しく恍然。九時頃就寝。夜半驟雨来る。

廿一日 六時半起。晴。饅頭にバタをつけて食す。朝食、鯖。午前、所々へ電話。養徳社の木村君来る。川田君の「吉野の落葉」その他持参。廿四日養徳社の顧問會ある由。出席の旨返事す。高折夫人来訪。米一升を貰ふ。京都新聞の杉山君来る。午食、例の如し。午后、突然進駐軍の命に依り、明日限りホテルを退去せられたしとのこと。宿に困りて二三問ひ合はす。八東、斎藤両君来り、共に八幡に赴きて松花堂の西村氏を訪ふ。もみぢ寺を一見、借りることに話を極めたる后、鰻、海老、などにて一酌。酒は金鶏正宗にて芳醇、快く酔ひたり。八時過京都に販着。約束ありし近江氏とは遂に會はず。萬屋にゆきて金子氏に會ひ宿を定む。席上下村氏に會ふ。この夜晩食を食せず、斎藤氏より貰ひたる焼米等にて饑えを凌ぐ。十時頃就寝。

廿四日 五時半起。髯を剃る。半晴半曇。歌を三四首つくる。

朝食、天ぷら、握り飯。午前、八時ホテルを出で、九時京都発の奈良電に乗る。梅原博士、上村氏、木村君同行。車中元の京都総務部長野間氏に會ふ。雑誌の歌の選の依頼を受く。十時半頃天理着。養徳社に寄りて先着の新村博士、松井専務、高橋、生駒の諸氏に會ふ。共に中山管長邸にゆく。高田博士遅れて来り、富永図書館長、反町氏などを来り加はる。座敷にて午食の饗あり。眞名鯉刺身、海老と芋うま煮、はもずいき酢のもの、はも照焼、鳥野菜うま煮、煮魚、鯛清汁、茄子胡麻あへ等。一酌小酔。終りて別室にて蕨餅。汽車のこと気になりたれば予一人先に辞去。三時発の電車に乗り、約三時間を要して五時半過ぎ京都着。進駐軍来着につき廿五、廿六の両日一般旅客輸送停止の揭示を見て大に驚く。直ちに予定を改め今夜の十一時五十五発の列車に乗ることにし指定券を得たり。ホテルの部屋にて野菜うま煮を肴に握めしを食したる后十時半まで休憩して少時假睡。漸くにして十一時五十五分の列車に乗る。殺人的混雑言語に絶す。

廿五日 遂に堪へ得ずして夜半二時米原にて下車。プラットホームに新聞を敷きて休む。大荷物を持てる復員兵士等多く、交通を妨ぐることに甚し。軍部の醜態見るに堪へず。三時頃月を見つつ握り飯二個。漸くにして六時二十三分発の名古屋行の列車に投ず。乗客多からずして座席を得たり。秋天晴れて一片の雲なし。七時半頃岐阜着。再びプラツトホームにて休むこと二時間。九時五十分岐阜発の列車に乗る。漸くにして座席を得。朝飯とも午飯ともつかぬものとして握り飯を食す。昨夜眠らず、孝子も予も頗りに假睡。

四時半頃八尾着。宮田支店に休みたる后六時近く宮田旅館に入る。直ちに鏡湯にゆき、晩食を済ましたる后八時頃就寝。熟睡。

廿六日 六時半起。朝食の味噌汁久しぶりにてうまし。笹津の鶴田氏より電話。明朝来る由。午前、手紙を書く。留守中の書状を閲し、返事を認めたる后日記を書く。今日より頭部の繃帯を取り去る。午食、卵の花、芋蔓、粥。午后、日記の續きを書く。大に疲れて體痛し。三時郵便を出しにゆきたる后玉生氏を訪ひ赤飯の馳走になる。綿氏に會ふ。小谷氏来訪。京都へ移る旨話す。米その他を依頼。手紙を書く。晩食、松茸味噌汁、茸野菜シチュウ等。夜、八時頃就寝。隣室に来れる小役人等うるさし。

廿九日 七時起。曇。後晴。新聞に依れば天皇陛下には廿七日親しくマ元帥を御訪問遊ばされたる由。恐疎に堪へず。朝食、茄子卵の花あへ等。午前、手紙を書く。小谷氏来る。郵便局にゆきたる后秋路氏を訪ひ私製葉書を乞ひ受けて販る。小又氏より電話あり、三日上市町にて會合したしとのこと。諾。驛前運送店より電話、小口扱関西行を取扱はずとのこと。如何にせむかと惑ふ。午食、鱈煮付。午后、孝子と共に驛前丸通を訪ふ。支配人に面會相談の結果、結局貨車一輛を借切ること話極め、更に驛長に會ひてチツキ五貫目まで許されぬ旨を聴き、すべて好都合なるを喜んで販る。途中道端に憩ひて柿を食ふ。歸宿后更に卵の花村に谷井氏を訪ひ、焙り米菓子と番茶の馳走になる。三時過鏡湯にゆきて入浴。廣田壺中居来訪。東京の近状を聴

く。晩食、早松茸、茸豆腐汁。小酌。夜、川崎氏を訪ひて本を返す。飯りて八時過就寐。芥川龍之介を讀む。蚤ありて眠れず。

〔右欄外〕×このあたり茸の種類多し。早松茸、鼠茸、櫻茸、

〔三十日〕七時起。晴。手紙を書く。朝食、早松茸、茗荷味噌汁。午前、小谷氏を訪ひたるも不在。秋路氏をちよつと訪れて飯る。近衛公へ母堂長逝に対する弔詞。新村博士の「糧」を讀む。うとうとと眠たし。午食、大豆味噌、干魚、粥。午后、村海老亭来る。鳥その他を携へ来り、予等のために送別の宴を開かむといふ。好意を受諾。貰ひたる柿などを食しつつかす。午過ぎより曇り来りて懶し。臥讀。夕刻廣田壺中居来る。六時頃より開宴。會するもの壺中居、谷井君、大山金鼓洞、村海老亭、玉生氏不參。秋路君偶然来る。料理は、枝豆、鶏松茸清汁、鶏松茸油焼、鶏、松茸、玉葱等の水炊き、終りに椎茸入りスープ飯。酒は一升五合。久しぶりの美味に鼓舌。九時近く散會。間もなく就寢。

*1 井伏鱒二の「里村君の繪」……『文藝』昭和二十年五月合併号掲載。戦死した従軍作家里村欣三についての回想。

*2 紅葉寺……八幡月夜田の宝青庵の通称。

*3 突然進駐軍の命に依り、明日限りホテルを退去せられたし……勇の滞在先である河原町御池にあった「京都ホテル」

(現在の京都ホテルオークラ)は進駐軍の宿舎として接收。

*4 中山管長……中山正善(一九〇五〜六七)天理教二代目真柱、管長。教祖中山みきの孫。

*5 進駐軍来着につき廿五、廿六の両日一般旅客輸送停止……

……九月二十五日、聯合軍第六軍が京都に進駐。同日の『京都新聞』によれば、当日は通行禁止区域が設けられ、市電は休止。「公務以外の外出」も禁止された。

*6 小又……小又幸井(一九〇〇〜一九〇九)富山の歌人。

【家探しの上洛——進駐前夜の京都】

九月四日に「近畿居住」を決めた勇は、十八日から二十四日まで家探しのために孝子と上洛。日記をみると、当初の予定を急遽変更し、二十四日の夜行列車で八尾に戻っている。翌二十五日より、京都市中への聯合軍第六軍の本格的な進駐が始まったからである。

京都での仮寓先として、松花堂に隣接する八幡の「紅葉寺」宝青庵を借りることが決まったのは、二十一日のことであった。ちょうど同じ日、進駐軍の命により「京都ホテル」からの退去を指示されたため、勇夫妻は萬屋を仮押さえし、結局二十二日から京都ステーションホテル(現在の京都センチュリーホテル)に移った。「京都ホテル」の接收準備が、進駐以前の二十一日から行われていたことを裏づける貴重な記録である(実際の接收は二十六日から)。⁴⁾

混乱の中で慌ただしく八尾に戻った勇は、さっそく疎開先を引き上げる準備にかかる。三十日には、廣田壺中居(不孤齋)による「送別の宴」も開かれている。廣田はその時のことを、「私はささやかながら先生の送別会を催したいと思ひ、友に頼んで鶏を一羽求め、先生と食事を共にしてお別れの盃を酌みかわした。」(「吉井勇先生と語る」⁵⁾)と語っている。

昭和二十年十月

〔二日〕七時半起。曇。朝食、松茸等。午前、漸く晴れ来る。菊澤にゆきて理髪。かへりてよく頭を洗ふ。久しぶりにて揮毫。出来るし。小谷氏依囑の大間知氏の分幅一短四、その他幅六、短三。午食、松茸、芋の葉、粥。午后、八尾紙業に吉田君を訪ひ、紙の見本を矢部氏へ送ることを頼む。これより停車場前運送店にゆき用談。暑くして汗滴る。留守に村海老亭来りし由。卓一個持参。二百五十円也。米代その他として百五十円を與ふ。秋路氏今夜濁酒を酌まむと言ひに来る。小谷氏来る。大間知氏依頼の揮毫物を渡す。米のこと明日午前わかる由。夕刻より秋路居を訪ふ。歌幅等持参。小谷氏も来る。三人鼎座して飲む。南風吹き暑し。茶碗蒸し、焼松茸、鮭等。七時頃飯りて晩食、牛肉野菜シチウ、蛤塩蒸し、松茸汁、夜、秋路氏孝子のために茶碗蒸しを携へて来る。この人誠意ありてよし。八時過就寝。駱風何處にか發生したるらしく、終夜ものものしき風吹きやまず。

〔三日〕五時半起。風猶強し。されど暁天の色の美しさはえも言はれず。握飯一個を食したる后、六時頃家を出づ。七時二分八尾発の列車にて富山にゆき、駅頭出迎の小又氏に會ふ。ともに烈風中を電車にて滑川町に赴き橋本一井氏邸に入る。翁、直江両氏加はり、いろいろと語る。談殆んど軍部に対する憎悪の声ならざるはなし。橋本氏も加はりて午食。刺身、焼魚、魚フライ、酢のもの、牛肉、野菜うま煮、

魚入り味噌汁等、近来の珍味。酒中酌。やや酔ひて悪筆を揮ふ。三時頃辞去。小又氏よりうどんを贈らる。風止みて猛雨。富山駅に着すれば汽車出でたる后にて猶二時間待たざるべからず。止むなく故國に販る鮮人の群を眺めつつ時を過す。これも敗戦風景かと思へば心漸く落莫たり。六時半発の列車にて八尾に飯り、雨中宿に着きしは八時に近し。一酌して晩食、蛤塩蒸し、肉野菜、五もく飯、八時過吉田君来る。紙を貰ふ。秋路君来る。封筒を貰ふ。十時近く就寝。夢を見る。雨猶止まず。橋本邸に手帖を忘れたるに気付く。留守に北日本の鷹取氏挨拶に見えたる由。

〔四日〕五時起。電燈の下にて手紙を書く。雨瀟々たり。北日本新聞の最後の歌の選を了す。武鐘氏の詠草の添削も了す。朝食、南瓜等。午前、忘れたりと思ひし手帖発見。郵便局にゆく。銀行にゆきたる后、平野氏を訪ひ別辞を述べ。ウキスキーの馳走になる。河村幸次郎君七日に来尾の由なれど、又ゆき違ひになりて會へず。飯りて揮毫。小谷君秋路君来る。荷造りの人夫来りて残りの四個を了す。午食、鯖、粥。午后、孝子鏡湯その他に挨拶にゆく。小又氏の便来り煮干を貰ふ。昨日借りたる傘を渡す。郵便局にゆきたる后、玉生、川崎、署長、組合、秋路、小谷、廣田、町長等に挨拶に廻る。停車場にゆきたるに孝子にはぐれて先着。丸通運送店にての用事を済まし、駅長室に至りて切符を買ひたる時、孝子漸く遅れて来る。運送店の吉田氏と語りたる后、五時頃孝子とともに高島に於ける送別會にゆく。玉生、川崎、小谷、秋路の諸氏。牛肉、蟹、松茸、鮫、鶏等。中酌。秋路のおわら哀艶なり。八時頃散會して販る。晩食、牛肉、

野菜、松茸等。秋路君に短冊を渡す。小谷君来りたれど少時にして去る。荷物を片づけ終りて九時過就蓐。雨降りやまず。

〔五日〕猶雨降る。三時半起。床中「猿蓑」を讀む。残酒一酌。南瓜を食す。四時過停電闇黒となる。暗中摸索しつつ旅支度。秋路、小谷、堀等の諸氏来る。五時過宿を出づ。前記三氏の外宮田の娘房子、見送りのため停車場迫来る。村海老亭も柿、芋等を携へて馱頭に在り。六時十九分岐阜行の列車に乗る。見送りは前記の諸氏の外八尾紙業の吉田桂介君。これにて八ヶ月間、生活せる八尾に別る。幸ひにして座席を得たるも、途中より乗車せる鮮人群の大蒜臭さには閉口す。朝食午食ともに握飯、鮫の煮付と沢庵。午后一時岐阜着。折柄の大雨に全身濡鼠となる。午后一時卅六分発小田原行の列車に乗りたるに、これも又空席多く、悠々二人にて四人分の座席を占むるを得たり。猶風雨烈しく、見渡すかぎり濁水滿々。田畑は悉く水浸しにて今年の農作如何あらむかと憂慮せる。濱松を過ぐれば漸く雨少なく、静岡あたり既に土の乾けるを見る。車中食するもの、握飯、ビスケット、林檎、梨、柿等。夜、九時半頃熱海着。田岡氏に迎へられて汐見屋旅館に入る。入浴后晩食、鱈煮魚、蛤汁。飯少々。悉く不味。十一時頃就蓐。疲れたるゆゑにや盗汗出づ。

〔六日〕五時半起。入浴。雲多けれど天漸く晴れたり。朝食、櫻海老、味噌汁。柿など食す。勘定を命ずれば田岡氏既に支払ひたりとのこと。九時頃宿を出で散歩買物の后、田岡氏を訪ひて禮を述ぶ。蒸し芋を貰ふ。十時十五分熱海発の

列車にて東上。車中午食代りに芋を食す。東京着の後お茶の水を経て三時頃千葉着。一里の道を寒川河岸まで歩み、四時頃漸く国松家に入る。母、佐藤氏、松之助君、美彌代等に會ふ。牡丹餅、寒天等の馳走になりし後入浴して晩食。子が亡父に贈りしウキスキー猶在り。感慨を覚えつつ二三杯飲む。鳥野菜、茄子胡麻あへ、玉子入味噌汁等。亡父百ヶ日は明日と思ひしに、今日なりしとのこと。そのための東上なりしに残念なりき。夜、閑談。新聞に依れば、聯合軍司令部より内務大臣、警視總監以下警察官全部の罷免を要求、政府に対する指令漸く深刻ならむとす。九時頃就蓐。噓しきりに出づ。又鼻風邪か。

〔七日〕六時起。快晴。陽光眩ゆきばかり。朝食、獲り立て鰯の塩焼、芋味噌煮、味噌汁。午前、母、孝子同伴、来迎寺に孝子亡父の墓参にゆく。御経料を納めて焼香。飯途停車場に寄りてチツキ荷物をたづねたるも未着。十一時過飯る。牡丹餅三個を食す。あん、きなこ、胡麻の三種。午食、蟹、鶏野菜。午后、二階にてうとうとしつつも寄席中継の放送を聴く。文楽、山陽、馬楽等。東久邇宮内閣総辞職、幣原男に大命降下。三時過米團子にあんをつけて食す。家の前の河の風景変化ありておもしろし。夕刻近所の海岸を散歩す。晩食、蟹、鰯、豆腐味噌汁。ウキスキー二杯。夜、母、佐藤、孝子等と閑談。梨、林檎、煮小豆などを食したる后、九時頃床に入る。「文藝」所載秋聲の日記を讀む。盗汗、頻尿のため屢目覚む。雨降り出づ。

〔八日〕七時起。雨。田岡氏に手紙にて熱海の宿依頼。朝食、海苔、あさり味噌汁。午前、九時半国松家を辞去、東京驛

より直ちに大賀事務所を訪ふ。チツキ受取を孝子に渡すのを忘れ直ちに速達にて送る。不図今日は予の誕生日なるに気付く。午食の弁當を大賀氏事務所にて食す。白米、鰯、梅干。午后、正岡容、藝林社の後藤竹志君とともに来る。「蝶花楼物語」出版の話出づ。後藤氏に販りの京都市の切符を頼む。省線山の手にて池袋迄、これより都電にて長田家にゆく。久しぶりにて滋に會ふ。頗る元気なり。晩食、芋、鱈、菜汁。夜、七時の放送を聴く。幣原内閣殆んど成立せるも、あまり強力とも思はれず。雨烈しく、雷鳴を伴ふ。九時就寢。

*1 宮田の娘房子……宮田旅館の三女房子(当時二十歳)。

*2 吉田桂介……和紙工芸家(一九二五〜二〇二四)。戦後八尾紙業を退社し「越中紙社」を立ち上げ、本格的な手漉き和紙づくりに専心。棟方志功、芹沢銈介らの知遇を得る。八尾に「桂樹舎和紙文庫」を開設。吉田は若き日白秋門下の木俣修に師事して歌を詠んだ。歌集『けいろく』(二〇〇八)がある。

*3 田岡……田岡典夫(一九〇八〜八二)小説家。高知県出身。土佐隠棲時代以来の知己。『強情いちご』で直木賞受賞。

*4 秋聲の日記……徳田秋聲の日記は、『文藝』昭和二十年八月号に「日記抄」(昭和十五年)、同十月号に「續日記抄」(昭和十六年)が掲載された。勇が読んだと思われる「續日記抄」は、昭和十六年「十一月」十一日から十二月八日の日記。八日の結びは次の通り。「下の家の二階に寝てゐると、十時頃かと思ふ頃、子供が起しに来て、戦争が初まつたから、ラヂオを聞きに降りなさいといふ。」(をばり)

【八尾を去る】

十月五日、勇夫妻は早朝の汽車で八尾を去る。二月十日以来、約八ヶ月に及んだ勇の八尾疎開期間はこれで終わりとなる。

しかし、勇がこの時向かったのは京都ではなく、千葉の孝子夫人の実家(国松家)であった。五日に八尾を去ったのは、戦争末期、昭和二十年六月二十七日に亡くなった孝子の父の百ヶ日の法要に合わせるためだったことが日記からわかる。

八尾駅頭での見送りは、林秋路、小谷契月、堀氏、宮田房子、海老亭の村安太郎、それに吉田桂介の六名。八尾を去る前、十月三日には富山滑川で、小又幸井や翁久允らと別れを惜しんでいる。四日には八尾の料亭でも送別会が開かれていた。

東京では久しぶりに妹夫婦の許(長田家)を訪れ、軍隊から戻った一子滋しげとも再会している。その日、十月八日は勇の還暦(五十九歳)の誕生日であった。

二十日 六時起床。半晴半曇。入浴。午前、七時母と佐藤に別

れ宿を出づ。七時四十六分熱海発の列車に乗る。混雑甚し。急立したまま朝食の握飯を食す。孝子は静岡、予は豊橋附近にて漸く座することを得たり。午食もむすびと搔餅等。一時間程遅れて七時半頃京都市着。電車にて好太郎に會ふ。八時頃三條小橋の萬屋に入る。晩食、小鳥焼、芋精進揚、味噌等。九時過就寢。熟睡。

廿一日 七時起。曇時々雨。朝食后直ちに宿を出で近江氏を訪ふ。川田氏を訪ひたるも不在。中川にて理髪の後高折氏を訪ひ、水飴紅茶の馳走になりたる后齋藤氏を訪ひて移轉の打合せを済ます。白井氏の留守宅を見舞ひたる后再び近江氏方へ戻る。午食、鮭、野菜煮、芋菓子。午后、孝子と出町より歩いて宿に飯る。小憩。芋菓子を食したる后再び外出。井ノ本君を訪ひ、円山、四條等を経て先斗町中川に西村君を訪ひたるも在らず。ダンスホールの景況など見たる后飯宿。晩食、こち汁、こち松茸うま煮、このわた等。夜、雨降り出づ。チヨコレートなど食したる后八時頃就寐。よく眠る。

廿二日 七時過起。曇、猶雨模様。朝食、焼松茸。午前、住友銀行にゆき通帳を受取る。途上市川荒次郎君に會ふ。一旦飯宿の後大雅堂に田村君を訪ひて會談。小栗、田畑君等に會ふ。養徳社を訪ひたるも社員不在。用事を書き残して飯る。八束氏来訪。共產党演説會の模様などを聴く。午食、鮭の鐘詰。午后、萬屋主人、金子竹次郎君来り、三十余年前の懐旧談。忘れたる事多し。市川荒次郎君来る。鳥取安来近くに疎開し炭焼などなし居る由。これも多くは懐旧談。入浴の後五時過ぎ宿を出で近江氏宅を訪ひ晩食の饗を受く。二人にて酒五合、精進揚、松茸汁、松茸と菜酢のもの、煮魚等。九時頃辞去して飯宿。雨降り出づ。十時頃就寢。熟睡。

廿三日 七時過起。雨。朝食、海苔。午前、井の本君来る。十時近く宿を出で京阪にて八幡に至る。車中にて竹内四郎君に會ふ。途上石に踞して午食代りの芋と携帯食糧を食す。

松花堂※に西村氏を訪ひ、共に寶青庵にゆき猪山氏夫妻に會ふ。西村氏宅にて焼芋の馳走になりたる后京阪にて中書島に至り、更に市電にて城南宮にゆく。方除の守り札を受け參詣の後更に又市電にて飯洛。六時頃飯宿。晩食、にしん芋、松茸汁、ぬた等。夜、八時頃就寢。

廿四日 六時過起。半晴半曇。朝食の後養徳社木村君の來訪を受く。「定本吉井勇歌集」出来。印税持參。美術館の河村君来る。いろいろの社會狀勢を聴く。住友にゆきて用事を済まし、買物の后飯宿。午食、昆布など。午后、良正院に細井照道師を訪ふ。八幡に持ちゆく荷物など選りわく。川田氏を訪はむと思ひしも、電車混みたれば止めて飯る。晩食、松茸飯、全汁、全天ぶらの松茸づくめ。夜、主人の金子氏来り、蓮月の歌を書きたる茶椀などを貰ふ。九時過就寢。よく眠る。

廿五日 七時起。晴。今日八幡へ移らむとしたるも、運送屋主人病氣のため延期。朝食の後西村氏に電話すべく齋藤氏を訪ひたるも不在。止むなく一日延期の旨西村氏へ打電。川田氏を訪ひ時事及び歌を談ず。孝子来り共に散歩。四條より川端を経て五條に至り、更に又清水にゆく。茶店に憩ひて午食の握り飯を食す。買物の后高台寺より四條に出で、久しぶりに新京極にて映画を見る。「千日前附近」といへるもの。粗雑にして迫力なく見るに堪へず。六時頃飯宿。八束、岩木両氏来訪。今日八幡へ往きたる由にて気の毒也。晩食、にしん松茸うま煮、松茸汁。夜、九時頃就寢。

廿六日 七時起。曇りて寒し。朝食、唐辛子。午前、八時頃運送屋来る。つづいて岩木君も來訪。孝子、岩木君と共に

宿を出づ。途上桂文治に會ふ。十一時頃八幡着。途中中田氏へ寄りたる后十二時近く松花堂に着く。葱の味噌汁にて握り飯を食したる后西村氏と共に紅葉寺宝青庵にゆく。運送屋中々来らず。止むなく岩木君とともに八尾より送りたる荷を解きて片付く。心配しひたる米も大觀の繪もともに無事。夕刻大体の荷物の片附けを終る。西村氏方にゆきて入浴。枝豆にて麥酒の馳走になる。販りて岩木君等と晩食代りの蒸かし芋を食す。夜、八時過就蓐。二月五日京都を去りてより、北陸に流離の日を送ること八月余、漸く再び城南の地に隠棲を構ふことを得たり。人生の残夢春秋、この後のわが身や如何あるべき。

- * 1 市川荒次郎……二代目市川荒次郎（一八九〇—一九五七）。二代目市川左團次とともに自由劇場に参加。
- * 2 竹内四郎……日本画家・竹内栖鳳の子息。
- * 3 西村氏……西村大成（一八六〇—一九七〇）松花堂、宝青庵主人。
- * 4 二月五日京都を去りてより……昭和二十年二月五日に京都を発したが、途中汽車の不通などで引き返し、勇夫妻はようやく十日に八尾入りした。

【人生の残夢春秋】

勇夫妻は関東の親族の許で二週間ほど過ごし、十月二十日に京都入りする。疎開日記「續北陸日記」の最後の一週間は、京都三条の宿にしばらく滞在した後、宝青庵へ入庵するまでの記録である。九月二十五日より、京都にはすでに聯合軍第六軍の進駐が始まっていた。吉井勇の疎開日記

は入庵の日、十月二十六日をもって終わる。

とりわけ印象深いのは、入庵の日の結びの一節である。「人生の残夢春秋、この後のわが身や如何あるべき」——この感慨から、吉井勇の戦後の日々ははじまったのだといえよう。終戦の年、勇は数え年六十の還暦を迎えていた。

宝青庵時代の歌をまとめた歌集は『残夢』（昭和23・12）と題されている。後の「洛中日記第一卷」をみると、勇はこの歌集の題をなかなか決めることができず、数日間悩んだのち、昭和二十三年八月十五日に「歌集の題は芭蕉の「野ざらし紀行」中にある「馬に寐て残夢月遠し茶の煙」を典拠として「残夢」と定む」としている。題の決まったのがほかならぬ終戦の日、八月十五日であったのは、まったくの偶然ではあるまい。『残夢』という題には、「人生の残夢春秋、この後のわが身や如何あるべき」という疎開日記の結びの言葉が、やはり遠く響いているとみたい。

「北陸日記」「續北陸日記」は、戦争末期の疎開流離の日々を、一日も欠くことなく記録している。朝昼晩三食の献立の詳細な記述、空襲警報の記述など、そこには何か記録への執念のようなものさえ感じられる。この日記が、勇が歌を詠む上で重要な役割を果たしたことは、日記の記述をもとにして（おそらくは読み返して）、後に多くの歌が作られていることからわかる。一例を挙げると、八尾時代の代表作とされる「秋路の笛」の連作は、戦争末期の七月二十五日の出来事を、戦後の九月十四日になって詠んだものであった。しかし、これらの日記の価値は、単なる備忘録的なものではなく、何より、明日をも知れぬ状況下で

書き継がれた「生の記録」であるという点にこそであろう。和漢混交の文語文で書かれたこれらの日記は、戦時下の文学者の証言として、質、量ともに、永井荷風の『断腸亭日乗』の「罹災日録」に比肩し得る内容を持つ。

この日記の価値について、勇自身もはっきりと自覚していた節がある。戦後の「寶青菴日記 第一巻」を見ると、昭和二十年十二月十八日から同月二十二日にかけて、勇は「北陸日記」の整理」に取りかかっている。これは、「北陸日記」「續北陸日記」をきちんとした形で、あるいは「作品」として残しておきたいという意志のあらわれとみてよいだろう。結びに附せられた感慨——「人生の残夢春秋、この後のわが身や如何あるべき」は、勇がこれらの疎開日記を「日記文学」としてみていたことの一つの証左ともなるように思われるのである。

【註】

- 〔1〕秋葉四郎『茂吉 幻の歌集』『萬軍』戦争と斎藤茂吉（平成二十四年八月、岩波書店刊）に歌集成立の背景と全歌の詳細な検証がある。
- 〔2〕本稿からは割愛したが、「續北陸日記」十月十四日に、「午后、八雲の飯田君来る。「金泥」の再校を見る。初版二万部定價一円五十銭の由。」の記述がある。
- 〔3〕西川祐子『古都の占領 生活史からみる京都 1945—1952』（平成二十九年八月、平凡社刊）、「第二部 目に見えにくい占領—「闇」の生産／流通／消費の仕組み」（二四二

（二四三頁）参照。

〔4〕西川祐子の前掲書の巻末に附された「年表」には、二十五日の進駐に先だつて、九月二十一日に「米軍調査班入洛」とある（四五九頁）。「京都ホテル」からの退去命令は、この調査班からの指示であつたと考えられる。

〔5〕廣田不孤齋『骨董と友情』（昭和四十四年十月、現代美術刊・非売品）所収。廣田と勇の交友については、『北日本新聞』の連載、細川光洋「吉井勇と高志びとたち」戦中日記より¹¹「廣田不孤齋」（平成三十一年一月十日）でもふれている。

〔6〕「洛中日記 第一巻」は、昭和二十三年八月二日～同年十月二十一日（午前）の勇の日記（歴史館所蔵）。

〔7〕「寶青菴日記 第一巻」は、昭和二十年十月二十七日～同二十一年六月十三日の勇の日記（歴史館所蔵）。

【付記】

*本稿は、科学研究費学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）（一般）17K02457）による研究成果の一部である。

なお、本稿執筆にあたって、京都府立京都学・歴史館の大塚活美氏、立命館大学の加藤政洋先生、北日本新聞社の近江龍一郎氏、高志の国文学館の綿引香織氏、公益財団法人翁久允財団の須田満氏、小谷契月氏のご子息・小谷健二氏、林秋路氏の二女・林淑子氏、その他多くの方々より、資料提供をはじめとする懇切なご教示・ご助言をいただいた。記して感謝申し上げます。